

日本語要旨

子どもの言語獲得への用法依存アプローチ

マイケル・トマセロ（マックスプランク進化人類学研究所）

言語の用法依存モデルでは、人間が言語を学習したり使用したりする個々のコミュニケーション事態に重きをおく。このモデルによれば、個々の人間が言語を操作する際に使用している心理言語学的単位は、理論が要請することによってではなく、実際のコミュニケーション事態における、実際の言語使用を観察することによって決定される。このようにデータに基づいたアプローチをとるため、用法依存モデルは子どもの言語の分析をするのには特になじみやすい。なぜなら、子どもは大人と同じ心理言語学的単位を学習したり使用したりするのではないからである。本論文では、言語獲得における用法依存モデルの概観を提示する。（小林春美 訳）

日本語モノリンガル幼児による語用論的能力の発達

中邑啓子（慶応義塾大学）

本研究では、日本語モノリンガル幼児の様々な語用論的、社会言語学的要素の獲得を考える。特に、日本語の中の三種類の言語現象、（１）丁寧語（２）尊敬語・謙譲語（３）男性語・女性語に焦点を当てる。この３種類の言語形態は、異なる獲得の過程をたどるが、異なる発達パターンを比較し、相違の要因を検討する。データは、縦断的に行われた毎月の幼児（１～６歳）の家庭訪問に基づいており、子どもたちが様々な人々（例：両親、兄弟、友達、知らない大人）と多様な状況（例：ごっこ遊び、おやつ、ブロック遊び、絵本の読書）の中で関わっている場面をビデオ録画し、分析した。本研究のデータを日本語・英

語のバイリンガルの幼児や大人の発話とも比較し、社会的状況が語用論的要素の獲得に果たす重要な役割を検討する。

社会的意味の獲得 日本語の丁寧体の場合

クック治子（ハワイ大学）

本研究は家庭と学校における子ども、親、先生の相互行為に出現する社会的意味を以下の点から考察する。1) 子どもは丁寧体の社会的意味を何才で獲得するのか。2) どのような社会的意味が獲得されるのか。3) 家庭と学校の丁寧体の使用のされかた、その社会的意味は異なるのか。データ分析の結果、子どもは、3才までには、丁寧体を適切に使用することができる。家庭においても学校においても使用される丁寧体の社会的意味は、丁寧さの表現ではなく、公の自己（背筋をただした自分の姿）の表示であることが判明した。

第二言語における語用論的能力発達研究への様々なアプローチ

ガブリエル・キャスパー（ハワイ大学）

本論文では、第二言語学習者の語用論的能力の発達に関する多様なアプローチを検討する。第一のアプローチは、語用論的能力を伝達能力の包括的モデルとの関係でとらえ、語用論をその独立した構成要素と捉えるか、もしくは他の文法能力との相互作用において捉える。第二の視点は、語用論的能力の学習を情報処理として捉え、注意、覚知、インプット、メタ語用論的知識などの役割を重視する。第三のアプローチは語用論的能力の学習を社会文化的視点で調査するもので、教師と学習者の、また学習者同士の言語活動における援助された言語行為を通して語用論的能力がいかに出現するかに焦点をおく。第四のアプ

ローチは、言語社会化であり、文化的、また語用論的な知識が学習者のくり返しおきる、状況に埋め込まれた活動に参加することでどのように学習されるかを検証するものである。(白井恭弘 訳)

Excuse me, but please assist my project

英語イメージョンプログラムに在籍する日本人年少者の語用論的能力の考察

カイト由利子(関西大学)

作井恵子(オークランド大学)

本稿は年少者の第二言語における語用論的能力を明らかにしようとする研究である。外国語学習の一モデルであるイメージョン教育については、これまでに多くの研究がなされてきた。例えば、カナダのフランス語イメージョンプログラムの研究は、主に学習者の第一言語、第二言語、学科科目における成果を焦点としてきた。日本で唯一の英語イメージョン(IM)に在籍している学習者についても、研究対象はカナダからの報告とほぼ同様であるが、これらの研究は言語発達や、心理学的適応などであり、学習者がどのように言語を使用し、コミュニケーションをしているか、つまり語用論的能力についてはほとんど触れていない。本研究はIM生徒(10歳から13歳の日本人学習者)の3つの発話行為(依頼表現、謝罪表現、ほめ表現の返答)について検討した。30場面の絵を見ながら口頭で答えるCartoon Oral Production Task(COPT)(Rose, 2000)を使用し、どのような語用論的能力を持っているのかを明らかにした。さらに同年代のアメリカ英語を母語とする生徒(NS)にも同じCOPTを使用した。IM生徒とNS生徒を比較すると、IM生徒は同じレパートリーを持っているが、それぞれの場面でどのストラテジーを使用するかに、相違点がみられた。本研究では日本人年少者の英語に関する語用論的能力の基礎データが提示され、さらに将来の研究課題が示された。

認知言語学からみた言語習得の展望

山梨正明（京都大学）

これまでの言語習得研究は、基本的に次の二つのアプローチに大別される。一つは、言語能力としての文法と語用論的な知識の自律的な区分を前提とするアプローチ、もう一つは、語用論的な知識の経験的な基盤から文法の発現を問い直していくアプローチである。前者は言語運用能力からの文法の自律性を前提とする規則依存 (rule-based) のアプローチ、後者は言語運用能力から文法的知識を再規定していく用法依存 (usage-based) のアプローチとして区分される。本稿では、認知言語学の研究で注目されている後者の用法依存のアプローチから、構文、モダリティ、談話標識を中心とする第1言語、第2言語の習得のメカニズムの問題を考察していく。特に、本稿では、言語習得の過程で重要な役割を担うと仮定される言語ユニットのスキーマ化、拡張化、事例化のプロセスが、第1言語、第2言語の習得過程にどのように関係しているかを、用法依存の言語習得モデルの観点から考察していく。また、この用法依存の言語習得の視点から、文法の自律性と語用論からの言語能力の自律性を前提とする規則依存の言語習得のアプローチを批判的に検討していく。

日本語とフィンランド語における重複子音 大人の発話と言語習得における違いについて

青山桂（ハワイ大学マノア校）

重複子音は音節よりさらに小さい音韻単位であるモーラを形成するという点で単子音と異なっている。本研究では、日本語とフィンランド語における単鼻音と重複鼻音の違いの習得と、それに伴うモーラ単位の習得を検証する。日本語とフィンランド語における子供の言語習得に関する実験では、フィンランド

人の子供は三才までにすでに単鼻音と重複鼻音の違いを習得しているのに対し、日本人の三才児では単鼻音と重複鼻音の違いはまだ獲得されていないという可能性が観察された。次にフィンランド人と日本人の成人の発話を比較した実験では、フィンランド語では重複鼻音と単鼻音の持続時間の差が日本語に比べて大きいという結果が得られた。これらの結果に基づきフィンランド人の子供は、重複鼻音と単鼻音の差がより明らかな大人の発話を耳にしているため日本人の子供に比べ習得が早く、二言語間の音韻単位の獲得時期の違いは、大人の発話での音声学的な違いに由来するということが推測される。

4 歳児における音韻発達 統語・語彙・記憶能力との関係

風間雅江（北海道浅井学園大学）
阿部純一（北海道大学）

本研究では、日本語話者の幼児において、4歳という時期に言語音の産出が正確になっていくことに、どのような認知能力の発達に関係するのかについて検討した。通常の発達過程にある4歳児25名を対象とし、同一児に対して、音声産出課題、統語理解課題、語彙課題、および記憶課題の4つの課題を行った。各課題における反応を分析した結果、以下のことが示された。4つの課題のスコアについて、月齢を統制した偏相関係数を求めたところ、音声産出課題のスコアと統語理解課題のスコアとの間にのみ有意な偏相関が認められた。さらに、音声産出課題のスコアを従属変数とし、統語理解課題、語彙課題、および記憶課題のそれぞれのスコアを独立変数として重回帰分析を行ったところ、統語理解課題のスコアにのみ有意な偏回帰係数が得られた。以上の結果は、4歳という年齢において、音声産出能力の発達と統語能力の発達とが密接に関係しながら進む可能性があることを示唆しているといえる。

大人によるジェスチャーの観察にもとづく部分名称の学習

小林春美（東京電機大学）

本研究では、大人が新奇な事物の部分に接近して意図的な動作をしたときに、2歳児がそれに注意を向け、その部分の名称を学ぶかどうかを調べた。実験では、実験者は事物の部分指さし、命名し、その部分に関する動作をジェスチャーで示すか、あるいはジェスチャーをせず単に指さしと命名のみを行った。実験者はジェスチャーを提示するとき、部分に触れたり部分を実際に動かすことは全くなかった。29人の日本人の2歳児は、与えられた名称で呼べるのはどのような対象かを強制選択テストによって回答するよう求められた。結果、子どもたちは、実験者が部分に関してジェスチャーを提示した場合には、部分名称を正しく部分と結びつけた。本研究は、Kobayashi (1998) が示した、部分への動作の提示の効果は、実際に部分が動作により動くことがなくても観察されることを明らかにした。部分に向けられたジェスチャーのような大人の意図的な動作は、実際の動作と同様に部分名称を学ぶ際の強力な手がかりとなりうることを示された。

日本語獲得における格マーキングからの立ち上げについて

鈴木孝明（京都産業大学）

動詞の状態性に関する意味の獲得において、格マーキングとの対応関係（NP-がNP-を非状態動詞、NP-がNP-が状態動詞）が子供の言語獲得に統語的な立ち上げとしての役割を果たすのかどうかを調査した。3歳から7歳までの59人の幼児を対象に絵画選択法による実験を行った。実験では「NP-がNP-を」と「NP-がNP-が」の構文において造語動詞を使用し、これらの構文で使われる格マーキングのパターンから造語動詞の状態性に関する意味を子供が推測することができるかどうかを調べた。結

果は5、6歳以上の年長の子供のみがある程度の能力を発揮するに留まるといったものであった。これは日本語獲得において格マーキングからの立ち上げは、動詞の状態性を学習する際の主要な方略ではないということを示しているようである。しかしながら、追加実験においては大人の被験者も年長児の子供とあまり変わらない結果に終わったことから、子供が動詞の意味を推測するために格マーキングを使用する能力は5、6歳で大人と同程度の一定レベルに達するということが、またこの立ち上げ操作は比較的弱いものであるということが考えられる。

母子相互作用での敬語使用 言語社会化の視点から

中邑啓子(慶応義塾大学)

本研究では、日本人の子どもがどのような過程を通して敬語（例：尊敬語、謙譲語、丁寧語）が使えるようになるかを言語社会化の視点から検討する。発話前の乳幼児の母子相互作用の中での言語使用に焦点を当て、まだ発話行動がない乳幼児とその母親14組の毎月のビデオ録画をデータとして分析した。本研究の結果では、発話前の初期段階でも、母親達は子どもとの自然な会話の中で敬語を使用することにより、子どもに敬語使用の様々な機能を現していることが明らかになった。母親達は（1）モデリング（2）直接的な指示（3）遊び、という三つの方法を使い、乳幼児たちに様々な異なるレベルの敬語に慣れさせた。また、母親達との敬語使用についてのインタビューの結果によると、大多数は、自分が子どもとのやりとりの中で、敬語を使用していることを否定し、敬語レベルの変動に気づいてはいなかった。

ターン交替の間隔

Yes/no 疑問に対する 2 歳児の応答に関して

浜崎なおみ（中京大学）

養育者との会話の中で、幼児は確認のためのYes/No疑問と、もっと能動的な反応を要するような「本当の」Yes/No疑問を区別するようになる。確認のためのYes/No疑問とは、相手の直前の発話を確認するためのYes/No疑問である。本研究では3人の2歳児とその養育者間会話の音声データ分析に基づいてこのことを検証した。幼児は2歳初期から、直前の発話に関する確認のためのYes/No疑問（CFM）へも、それ以外のYes/No疑問（YN）へも、同じくらい短い間隔で応答することができる。成長するに従い、CFMに対する応答の間隔はさらに短くなっていく。しかしながら、YNへの応答に要する時間は長くなる。ビデオデータをもとにした分析において、養育者のYes/No疑問の内容も変わっていくこと、さらに幼児の応答も多様化していくことを示した。初期のYNは形が制限されルーティン化されたものであったのに対して、CFMとYNで応答間隔の差が現れた頃のYNは、幼児の側にもっと能動的な反応を要するような「本当の」Yes/No疑問が見られた。この結果は、幼児は初期における応答システムを再分析し表象システムを書きかえていることを示すものである。

英語冠詞システムに関する日本人学生のメタ認知知識

バトラー後藤裕子（スタンフォード大学）

冠詞の習得が英語学習者にとって難しいことはしばしば指摘されてきたが、どうして冠詞の誤用が多いのか、その理由についてはまだよくわかっていない。本研究は、学習者の冠詞に関するメタ認知知識を分析することで、どのような理由付けのもとに冠詞を使用しているのか、そしてこうした学習者の冠詞使

用に関するアプローチの仕方には、習得レベルに応じて違いがあるのかを検証した。80名の日本人大学生・大学院生（日本人学習者は英語の習得レベルに応じて4つのグループに分けられた）と20名の英語のネイティブスピーカーに、英語の冠詞穴埋め問題（100問）を行ってもらった後、1問1問その冠詞使用の理由を述べてもらった。その結果、まず、上級学習者になるにつれて、冠詞の使いかたはよりネイティブスピーカーに近いものになっていくものの、ネイティブスピーカーと日本人学習者との間には、大きな隔たりがあることがわかった。また、日本人学習者は英語習得レベルに応じて、異なったアプローチをとっており、上級者になるにつれて、文脈をより正確に考慮して冠詞を選択していることがわかった。しかし上級学習者でも話し手（ないしは書き手）の指示するものが果たしてすでに聞き手（読み手）にとって周知のものなのか（「聞き手の知識」）、指示するものが数えられるものか（「数」といった冠詞機能を担う概念を文脈の中で正確に判断するのが難しく、これが日本人学習者の冠詞の使いかたに誤用が多い原因のひとつであると考えられる。

日本人英語学習者の代名詞格標示

須田孝司（大東文化大学）

若林茂則（群馬県立女子大学）

本論文では、日本人英語学習者による初期段階の代名詞格の習得データをもとに、3つの第二言語習得モデル(Full Transfer/ Full Accessモデル(Schwartz & Sprouse, 1994, 1996)、Minimal Treesモデル(Vainikka & Young-Scholten, 1994, 1996)、Lexical Learning/ Lexical Transferモデル(Wakabayashi, 1997, 2002))の妥当性を検証する。実験では、28人の中学1年生に日本文を与え、その日本文の英訳として正しいと思われる英文を選ぶように指示した。実験の結果、被験者は、正しい英文(e.g. He hits/likes her)以外に、主語にも目的語にも主格代名詞を使用した英文 (e.g.

He hits/likes she)や主語にも目的語にも対格代名詞を使用した英文(e.g. Him hits/likes her)を正しいと判断することが観察された。被験者の個人データを分析すると、被験者はいくつかのパターンで特定の英文を正しいと判断していることも観察された。これらの個人データをもとに、Full Transfer/Full AccessモデルやMinimal Treesモデルでは、日本人英語学習者の代名詞格標示の一部しか説明できないが、Lexical Learning/Lexical Transferモデルでは、観察されたすべてのパターンを説明できることを示し、Lexical Learning/Lexical Transferモデルが第二言語習得データを説明するのに最も適していると提案する。

アメリカにおける移民の英語学習 何が第二言語の長期的達成に貢献するか

ジセラ・ジア (ニューヨーク市立大学リーマン校)
ドリス・アーロンソン (ニューヨーク大学)

横断的研究と縦断的研究により、第二言語としての英語の到達度に関与する要因について調査した。被験者は様々な年令でアメリカに移住し、調査開始時に最低五年はアメリカに住んでいた104人の成人学習者で、うち72人が3つのアジア言語、32人が6つのヨーロッパ言語の母語話者である。学習者の長期的到達度を音声と文字による二つの文法性判断テストによって調べた結果、アジア言語の母語話者はヨーロッパ言語の母語話者よりも到達度が低く、到着年令の影響がより顕著であったが、この相違は様々な環境、動機づけ、文化的変数と関連しており、またアメリカへの到着年令と母親の英語能力がアジア言語の話者の音声テストにおける得点のばらつきを有意なレベルで予測できることがわかった。一方縦断的研究の被験者は5才から16才の時点でアメリカに到着した北京語を話す11人の子供で、彼等の英語力と言語環境を調べたが、到着後3年間では年令の影響による有意な文法能力の差異はみられなかった。しかし、小さいうちにアメリカにきた学習者は、その

3年の間、より豊かな英語の使用環境にいることがわかった。言語環境の差は母語の能力や、年齢によって決まる社会的、文化的嗜好の違いによる。(白井恭弘 訳)

日英バイリンガル児童による語彙獲得 達成レベルにおける第一言語と第二言語の相関性

南 雅彦(サンフランシスコ州立大学)

本論文では、米国在住の日系児童の日英二言語間の嗜好、選択、達成レベルについて検証する。各児童のバイリンガル言語能力を測定する目的で、バイリンガル言語能力検(Muñoz-Sandoval, Cummins, Alvarado, Ruef, 1998)を実施、同時にバイリンガル児童の日本人の母親へのインタビューも行った。バイリンガル言語能力検査では、バイリンガル児童の日英両語の語彙の間に強い正の相関が認められた。例えば、第一言語(日本語)の語彙を多く習得している児童は、第二言語(英語)の語彙も多く習得している、ということがわかったのである。バイリンガル児童の第一、第二言語いずれにおいても一方の発達が他方の発達に関わりがあるということを、本研究の結果は示唆している。しかし日本語能力検査と英語能力検査の結果を比較すると、日本人を母親に持つ日系児童は英語能力の方が優れているということもわかった。母親へのインタビューの結果、日本人の母親が日系児童の日本語を維持してゆこうと懸命に努力しているにも関わらず、日系児童は日本語よりも英語を選択、使用することも明らかになった。本研究の結果はバイリンガリズム・バイカルチャリズムを推進してゆくうえで重要な意味を示唆している。

日本語における空間的前後と時間概念の対応

篠原和子（東京農工大学）

認知意味論の枠組みで、時間概念（過去と未来、先の時間とあとの時間）と前後軸の対応関係を分析する。主として Moore（2000）による分析をもとにし、それに対して、以下の点でさらに新しい分析を付け加える。（1）空間概念「前・後」と時間概念「さき・あと」および「過去・未来」の写像関係を支える経験的動機づけについて、異なるタイプの写像に異なるタイプの動機づけを考案し、それを分析することによって、「前＝未来、後＝過去」という写像がなぜ諸言語において一般的なのか、また他の写像パターンがなぜ一部にしか見られないのかを説明する。（2）Mooreが時間メタファーの分析の中で提案した「自己対立的方略」「自己整列的方略」の2方略と、「空間領域での語彙の使用が時間領域での語彙の使用を動機づける」という提案について、日本語の時間メタファーの例（「さき」などを含むもの）を用いてこれを支持する根拠を提出する。

日本語会話にみられる「とか」の使用について

ローレンス静（ミシガン州立大学）

本研究の目的は、話者の年令と性別、そして談話形態に注目し、これらが「とか」の使用にどのような影響を及ぼすか、また「とか」が会話でどのような機能を担っているかを、実際の会話データをもとに検証することである。若者（高校生）と中高年（50代～60代）の協力者それぞれ20人（男女各10ペア、合計40人）から会話資料（600分）を収集し、「とか」の使用頻度および意味・機能を分析した。データ分析の結果から「とか」の使用は年令差、及び性差（若者のみ）に影響されていることが分かった。特に若い女性の会話で「とか」の使用が顕著であった。しかし談話形態の違い（インタビューと友達同士の

お喋り)においては、統計的な有意差はみられなかった。また「とか」を3つのタイプ(並立、ぼかし、曖昧な引用)に分類し、それぞれの使用頻度を若い女性と男性、中高年の女性と男性の4つのグループごとに、そして2つの談話形態ごとに調べた。曖昧な引用マーカーとして「とか」を使う用法は主に若者に限られており、特に友達同士の会話で使用頻度が高かった。一方、中高年グループでは、主に例示・列挙する並立の用法が目立っていた。話者の社会的属性、特に年令と性差が「とか」の使用において重要な要因であることが実証された。